

■ 受賞者業績

「第39回青森県農業経営研究協会賞」受賞者

➤ 氏 名 おとべ農産合同会社
代表社員 おと べ ひで お 乙部 英夫



➤ 年 齢 昭和36年生まれ・59歳

➤ 住 所 上北郡東北町字乙部

➤ 経営内容（令和元年度）

農業労働力	家族3人（本人、妻、長男） 常時雇用2人、パート1人、特定外国人技能実習生2人
経営耕地面積	普通畑 2,433a（うち借地 935a） 水田 110a（貸付） 採草放牧地 210a（貸付）
主な作付品目	ながいも 270a 「ネバリスター」 340a だいこん 600a 加工用キャベツ 600a ごぼう 180a ながいも種子 50a 「ネバリスター」種子 50a 緑肥 343a

【業 績】

ながいもを主体とした野菜の新たな産地形成及び
積極的な販路開拓による法人の安定経営

1 経営の発展経過と概要

(1) 就農の経緯

昭和 57 年 3 月 青森県営農大学校卒業後、実家の経営に参画

(2) 発展の経過

昭和 57 年、就農時の作付面積は、葉たばこ 100a、水稻 150a、だいこん 100a、ながいも 50a のほか、乳牛を飼養する採草放牧地 100a を合わせ約 5ha であった。

昭和 59 年、経営を父から受け継ぎ中核を担うようになる。葉たばこは減反が始まったことを機に廃作し、野菜主体の経営を目指すため農地取得により規模拡大を進めた。

平成 17 年、青森県農業経営士に認定され、経営は、ながいも 250a、だいこん 200a、にんじん 100a、ごぼう 200a、ばれいしょ 200a 等、全体で 10ha を超える経営規模となった。この間、農業改良資金を活用し、農業機械の大型化を図り、家族労働力（当時 4 人）だけで 10ha を超える作付面積を経営できるようになった。

平成 19 年、スーパー L 資金（農業経営基盤強化資金）を活用して冷蔵庫を導入し、だいこんは一時貯蔵することで収穫作業等の労働力調整を図り、ながいもとごぼうは、秋に収穫した一部を冷蔵し個別に洗浄・選別出荷することで、冬期間の作業を確保した。また、春掘りしていたながいも種子を秋掘りし冷蔵することで春の作業量が減り、早い時期に集中して植え付けができるようになったことから、生育期間についても十分確保できるようになった。さらには、本格的に栽培を始めたやまのいも品種「ネバリスター」についても冷蔵保管することで、通年出荷が可能となった。

平成 27 年、農業所得が 2,000 万円を超えたことから家族 3 人（本人、妻、長男）が役員となり、「おとべ農産合同会社」（以下、「おとべ農産」）を設立し、経営を法人化した。

平成 29 年、産地パワーアップ事業を活用して、ながいも専用冷蔵庫を導入し、自らが生産した「ネバリスター」のほか「ネバリスター生産組合」の加入者から生産物も買い取り、冷蔵保管、洗浄、選別の体制を構築した。また、同年にだいこん収穫機及びキャベツ収穫機を導入し、だいこんと加工用キャベツの作付拡大を図った。

平成 30 年からはスマート農業機械を導入し、さらなる作付拡大を進めている。

(3) 経営の概要

令和元年度の経営耕地面積は、普通畑が 2,433a（うち借地 935a）で、このほか野菜作に適さない水田 110a と採草放牧地 210a の計 320a は貸し付けている。品目別では、ながいも 270a、「ネバリスター」340a、だいこん 600a、加工用キャベツ 600a、ごぼう 180a、ながいも種子 50a、「ネバリスター」種子 50a、緑肥 343a となり、地域でも有数の大規模農家となっている。

また、令和元年度の生産物売上高は、ながいも 1,834 万円、「ネバリスター」2,931 万円、だいこん 1,034 万円、加工用キャベツ 1,833 万円、ごぼう 554 万円のほか、生産組合の加入者から買い取った「ネバリスター」等も含め全体で 12,525 万円となっている。令和元年度は、野菜の販売価格が低迷したものの税引前当期利益 146 万円、家族への役員報酬は 2,040 万円を達成し、相場に影響されにくい安定した経営を行っている。

〈表1〉 経営耕地面積

(令和元年度・単位：a)

地 目	面 積			備 考
	所有地	借入地	計	
普通畑	1,498	935	2,433	
水 田	110		110	貸付
採草放牧地	210		210	貸付
計	1,818	935	2,753	

〈表2〉 家族と労働力

(令和3年3月1日現在・単位：歳、日)

氏 名	続柄	年齢	年間農業 従事日数	年間兼業 従事日数	役割分担
乙 部 英 夫	本人	59	250	0	経営全般 (加工用キャベツ除く)
	妻		250	0	経営全般
	長男		250	0	経営全般 (主に加工用キャベツ担当)

注) 常用雇用2人、パート1人、特定外国人技能実習生2人

〈表3〉 主な農作物の生産・販売状況

(令和元年度・単位：a、kg、円)

作物名	作付 面積	数 量		仕向け内容		
		10 a 当たり 収量	総量	販 売		
				数量	単価	販売額
ながいも	270	2,963	80,001	62,519	■	■
ネバリスター	340	2,353	80,002	71,531	■	■
だいこん	600	5,022	301,320	301,320	■	■
加工用キャベツ	600	5,871	352,260	352,260	■	■
ごぼう	180	2,256	40,608	40,608	■	■

注1) ながいもと「ネバリスター」の総量は、棚卸分を含む。

注2) 単価の1円未満は四捨五入

〈表4〉 経営の推移

(単位：円)

区 分		平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
売上高	ながいも			
	ネバリスター			
	だいこん			
	加工用キャベツ			
	ごぼう			
	ばれいしょ			
	その他仕入販売等			
	計			
税引前当期利益				
役員報酬				

注) 会計期間

平成 29 年度は平成 29 年 7 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日の 8 か月分
 平成 30 年度以降は 3 月 1 日～翌年 2 月末

〈表5〉 青森県の経営指標との実績比較

(単位：円)

区 分	所 得	備 考
おとべ農産合同会社		令和元年度の実績
青 森 県	8,184,280 (100%)	「主要作目の技術・経営指標」により試算 (青森県農林水産部／平成27年9月)



2 経営の特徴

(1) 情報収集と自己研鑽で最新技術を導入

青森県営農大学校において実践的な課題設定によるプロジェクト学習を行い専門知識と農業に取り組む姿勢についての理解を深めた。さらに、旧青森県畑作試験場（現地方独立行政法人青森県産業技術センター野菜研究所）で行われた3か月間の研修に参加し、基礎技術等を習得した。これを基に、自らの課題解決に向けた様々な試験栽培に取り組んだほか、種苗会社や農業機械会社、普及・研究機関等の試験栽培も積極的に引き受け、技術の研鑽を積むとともに最新技術をいち早く取り入れるなど自身の経営に生かしてきた。

(2) 品質と収量を維持する土づくりと土地利用

平成3年から農協へ土壌分析を依頼し、分析結果に基づいた適正な施肥を行っている。

施肥は、化成肥料と有機肥料を組み合わせ、有機肥料の肥効を考慮して化学肥料の施用量と時期を調整している。また、緩効性肥料の作条施肥を行うことで施肥量を減らす工夫も行っている。

主力品目のながいもは4年1作の輪作体系を確立し、「ながいも→ごぼうまたはキャベツ→キャベツまたはごぼう→緑肥→ながいも」の計画的な輪作により連作障害を防ぐとともに、地力の向上にも取り組んでいる。また、加工用キャベツは、ほ場に合わせ微量要素を含む肥料を肥料会社に発注し混合の手間を省くとともに、微量要素欠乏に起因する生理障害であるチップバーンの発生を抑えている。

(3) ながいもの優良種子生産

ながいもの種子生産は、ウィルスに感染していないむかごを用いることはもちろんのこと、発病株の抜き取りを徹底し、自家利用のほか農協の種子生産部会へ販売している。

種子を丁寧に選別することで、品質はA・B品を合わせ60%台を維持している。

(4) 「ネバリスター」のブランド化と生産拡大

① 導入の経緯

「ネバリスター」は、カネコ種苗株式会社がながいもといちょういもの交配により育成した品種である。乙部氏は、平成17年に同社からの依頼を受けて3か年の試作を行っているが単なる試作にとどまらず、栽植密度や施肥方法等の栽培試験も行い、当該地域における栽培マニュアルの作成に尽力した。

② ブランド化と生産拡大

栽培マニュアルができたことに加え、糖度が高く粘りも強い「ネバリスター」が売れると確信した乙部氏は、平成24年から本格的に栽培を開始した。

「ネバリスター」の特徴をPRし、ながいもより高くかつ固定単価で販売することを条件に営業を行ったものの、市場からは一定の流通に見合う量と通年出荷が求められた。「ネバリスター」は普通のながいもより収量性が劣るため、当初は要望に見合う生産量を確保

できず、売り先がなかなか見つからなかった。その後、従来から導入していた冷蔵庫を活用することで、少ない量ではあったが夏場も出荷することが可能となり、関東の1市場と取り引きを開始した。

販売ルートを確認したことから、平成26年に「ネバリスター生産組合」を設立し、自らが積極的に栽培指導を行い、組織全体の品質と収量の向上を図った。また、加入者から「ネバリスター」を買い取り、冷蔵保管、洗浄、選別までを安価に請け負うことで、加入者の手取額の増加に寄与した。現在、「ネバリスター生産組合」の組合員は、生産技術を身につけた15名に限定し、「おとべ農産」を含む生産組合の作付面積は15haとなり、月40～50tの定期出荷を実現している。

（5）加工用キャベツを主力品目に育成

従来、当地域におけるキャベツは、ながいもやだいこんの合間に作付けされる品目であり、経営における位置づけは低いものであった。「ネバリスター」の取引先であるお好み焼きの製造業者から「ネバリスター」の品質が評価され、加工用キャベツの契約栽培につながった。確実な出荷先ができたことにより、現在は、ながいものに次ぐ経営の主力品目となった。

（6）施肥方法の改良による労働時間の短縮

ながいも栽培では、地域でいち早く被覆肥料を導入し、従来5～6回行われる追肥を2回までに削減し省力化を図った。また、秋に堆肥及び土壌改良材を施用することにより、春作業の軽減に努めている。

（7）従来機械の改良等による効率化と労働削減

ながいもの種子選別には十分な時間を確保して行っていたが、平成30年からはさつまいもの選別機を改良し重量選別を機械化したことにより、作業時間は従来のおおむね半分ほどに短縮された。また、ながいものほ場内運搬トレーラーでは、荷台に乗せたスチールコンテナへの積み込みのため荷台への乗り降りが必要であったが、油圧で荷台の高さを上下できる仕組みを考案し軽労化を図った。

また、キャベツ収穫機では、外葉が詰まらないよう引き抜き後の切断部分を改良するなど従来機械をより使い勝手の良いものに改良することで、作業の効率化を図っている。

（8）スマート農業機械等の導入による省力化

平成30年、産地パワーアップ事業を活用し、自動操舵機能付きトラクターや乗用型多目的作業機等を導入し、スマート農業に向けた基盤づくりを行った。

令和元年、国が進めるスマート農業技術の開発・実証プロジェクトに参加し、ロボットトラクターやGPS移動基地局等を導入したスマート農業の実証に取り組んでいる。

この実証では、自動操舵トラクターとロボットトラクターを組み合わせ1人のオペレーターで施肥と耕起を同時に行うことや、正確なトレンチャー耕やうね立て作業を自動操舵トラクターで行うことによりオペレーターの負担軽減と作業時間の削減、自動車速制御と

静電噴霧による農薬散布時間の削減などに取り組んでおり、さらなる経営の効率化が期待される。

(9) 就業条件の改善と従業員教育による労働力の確保

会社設立後、従業員の給与は年間を通じた定額基本給に加え、農繁期には手当を追加支給する体系を整えているほか、作業に必要な大型特殊やけん引免許の取得については、費用も会社が負担している。これにより、従業員は安心して働くことができ、会社としても安定した労働力の確保につながっている。

(10) 流通業者と連携した新たな販路開拓

平成 23 年、長男が 24 歳のときに茨城県職員（普及指導員）を退職し、Uターン就農。

平成 25 年、県が運営する若手農業トップランナー塾へ長男が参加したことを契機に、塾生として国産農産物の展示商談会である「アグリフード EXPO」へ出展。この際に取り引きのあった流通会社をもとに、その後、国内の 40 社以上と商談し、「ネバリスター」の取引先の拡大につなげた。

現在、「ネバリスター」の販売は商社と役割分担し、生産と集荷は「おとべ農産」、新たな販路開拓は「株式会社クロスエイジ」が行っており、お互いの得意分野に集中することで双方がメリットを得られる良好な関係を築いている。

なお、令和元年度の「ネバリスター」出荷量の出荷先割合は、商社（4 社）が 37.3%、農協関係が 40.7%、業務加工用が 18.7%、その他が 3.3%となっている。

(11) 簿記記帳と経営の見える化

平成 12 年、妻がパソコンによる複式簿記記帳を開始。

平成 15 年、農協の農業青色申告会に加入し、経営内容の見える化を図ってきた。

会社設立後は税理士による記帳としているが、月ごとの集計も行い、資金繰りが常に分かるようにしている。



「ネバリスター」の洗浄



「ネバリスター」店頭掲示ポップ

〈表6〉農機具の所有状況

(単位：台、円)

No.	種 類	規格・能力	台数	取得年	取得価額
1	トラクター	48PS	1	平成27年	1,851,852
2	ロータリー	作業幅180cm	1	平成27年	925,926
3	スライドモア		1	平成28年	920,000
4	化成混合散布機		1	平成28年	800,000
5	だいこん収穫機		1	平成28年	8,172,000
6	トラクター	95PS	1	平成29年	7,990,858
7	トラクター	28PS	1	平成29年	2,007,745
8	フロントローダー		1	平成29年	1,210,220
9	長芋掘取機		1	平成29年	1,754,141
10	ブロードキャスター		1	平成29年	400,000
11	トラック	4 t	1	平成29年	5,458,813
12	肥料散布機		1	平成29年	324,075
13	だいこん用コンベア他		1	平成29年	1,111,112
14	フォークリフト	2.5 t	1	平成29年	2,250,000
15	キャベツ収穫機		1	平成29年	9,517,200
16	ごぼう収穫機		1	平成29年	1,111,112
17	普通乗用車		1	平成30年	1,506,621
18	野菜移植機		1	平成30年	888,889
19	軽ワンボックス車		1	平成30年	1,270,981
20	冷蔵庫	30坪	1	平成30年	7,000,000
21	パラソイラー		1	平成30年	600,000
22	トラクター	113PS	1	平成30年	14,680,000
23	ハイクリブーム	650 ^{リットル}	1	平成30年	4,650,000
24	ながいも洗浄機		1	平成30年	740,741
25	だいこん洗浄機		1	平成31年	1,666,667
26	汎用大型管理機		1	令和元年	340,000
27	ワイドスプレッダー		1	令和元年	2,660,300
28	ロボットトラクター	113PS	1	令和元年	10,864,500
29	ブームスプレーヤー	1,050 ^{リットル}	1	令和元年	3,282,000

30	GPSベースキット		2	令和元年	824,900
31	GNSSガイダンスシステム		1	令和元年	2,155,500
32	静電ノズルキット		1	令和元年	1,230,000
33	軽トラック		1	令和元年	771,973
34	GPS移動基地局受信機一式		1	令和元年	2,480,000
35	GPS移動基地局三脚		1	令和元年	574,000

〈表7〉施設・建物の所有状況

(単位：円)

No.	種 類	構造	規模	取得年	取得価額
1	パイプハウス	鋼管	40坪	平成29年	846,233
2	野菜倉庫	鉄骨	50坪	平成30年	12,816,667
3	中古木造建物	木造	30坪	平成30年	3,703,704
4	パイプ車庫	鋼管	60坪	平成30年	1,365,000

〈表8〉品目別経営収支

(令和元年度・単位：円)

費目	経営全体	品目別					
		ながいも	ネバリスター	だいこん	加工用 キャベツ	ごぼう	その他 仕入販売等
売上高							
生産物売上高							
その他売上高							
手数料収入							
売上原価							
期首棚卸高							
農産物							
原材料							
当期商品仕入高							
当期製品製造原価							
種苗費							
肥料費							
農薬費							
水道光熱費							
諸材料費							
賃借料・地代家賃							
減価償却費							
車両費							
農具費							
運賃包装費							
支払手数料							
修繕費							
労務費							
その他雑費							
期首仕掛品棚卸高							
期末仕掛品棚卸高							
期末棚卸高							
農産物							
原材料							
売上総利益							
販売費一般管理費							
役員報酬							
その他人件費							
減価償却費							
その他雑費							
営業利益							
営業外収益							
営業外費用							
経常利益							
特別損失							
税引前当期利益							
法人税、住民税及び事業税							
税引後当期利益							

注1) 売上高、経費ともに税抜金額

注2) 売上高のうちその他売上高は、運賃立替収入等

3 地域農業への貢献

(1) 農協部会活動で地域農業をけん引

地域農家の所得向上を目指し、「JAゆうき青森ながいも部会」の副部会長を10年、部会長を8年務め、平成27年度から現在は、ながいも部会の上位組織である「JAゆうき青森野菜振興会」の会長を務めている。

ながいも部会では、ながいも通信簿を作成し、規格別の割合や収量について生産者ごとに集計している。これをもとに、評価の低かった部会員に対しては、集中的な指導を行うことで収量と品質の底上げを図っている。さらに、ウィルス感染した種芋による収量低下が問題となっていたことから種子部会を設置し、徹底したウィルス病株の抜き取りにより優良種子の供給体制を整えた。

また、「ネバリスター」の認知度を高めるため、乙部氏が立ち上げた「ネバリスター生産組合」に加えゆうき青森農協での取り扱いを働きかけたところ、六ヶ所村を中心としたゆうき青森農協組合員60名が生産するに至っている。

このほか、乙部氏の加工用キャベツの契約栽培への取り組みがきっかけとなり、平成28年にJAゆうき青森野菜振興会の中にキャベツ部門が組織され、農協を通じて関東・関西方面等の16社に出荷されるまでになった。

(2) 給料制と青色申告の波及で後継者確保

担い手を確保するためには若者が自由に使えるお金が必要と考え、給料制と青色申告の実施を地域へ呼びかけるとともに、自身も実践してきた。青色申告を行う農業者が増えたことにより、東北町は県内において若手農業者が多い地域となっている。

4 今後の展望と課題

スマート農業機械の有効活用による機械化一貫体系の確立を目指すとともに、従業員教育を行うことで、各作付品目の生産管理を従業員が主体となることができる体制の構築を図りたいと考えている。これらにより、近年の異常気象にも対応できる生産体制を確保しつつ、生産管理に十分目が行き届き、これまでの収量・品質や生産性を維持できる範囲内で、今後も後継者不足等により耕作できなくなった地域の農地を引き受け、規模拡大を進めていきたい。



ワイドスプレッターによる可変施肥



車速連動・静電噴霧



車高調節トレーラーを利用した
「ネバリスター」の収穫



種いも選別機



出荷直前のキャベツ



発送前の「ネバリスター」



スマート農機等格納庫